

《書 評》

杉本直美著『自立した読み手が育つ 読書生活デザイン力
—子どもが変わる読書指導—』

(2010年8月9日刊 東洋館出版社 A5判 209頁)

橋本 佳子

1. 本書の概要と構成

著者の杉本氏は、まえがきで以下のように述べている。

本書における読書指導は、子どもを何が何でも読書好きにさせようというものではない。読書の意義を実感させ、そのよさを知らせることが第一である。読書の意義を実感する機会、読書を通じて変化してきた自分を感じる機会、その手応えの積み重ねが、彼らを自立した読み手へと成長させるからである。結果として、多くの子どもたちは読書が好きになるし、好きになれなくても必要であれば本を手取るようになる。本書で紹介するのはそういった読書指導である。(p.1)

この発言からもわかるように、学校だけで終わることのない読書生活を築くための具体的な指導の一端を示したのが本書である。

全体の構成は、次のようになっている。

まえがき 発想の転換—本の紹介だけが読書指導ではない—

第1部 授業を変える〈新しい読書指導の理論〉

第2部 子どもが変わる〈実践を通して得たもの〉

第1章 学校全体で取り組み可能な読書指導

第2章 国語科で取り組む読書指導

参考資料「わたしの読書生活記録」(読書ノート)の手引き

2. 「主体的な学び」と「読書生活デザイン力」

書名にある「読書生活デザイン力」という言葉は、自らの力で自らの読書生活を切り開き、創り出していく力を指す筆者の造語である。杉本氏は、第2部で、「読み手が自身の読書生活に目を向け、今までの在り方を振り返り、現状をとらえ、これからの読書生活を自己の状況に照らしながら自覚

的に考え、組み立てていく力である。」(p.17)と説明している。

まさに、これは、平成28年8月26日に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より示された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」のアクティブ・ラーニングの視点につながる。第1部の学習指導要領等改訂の基本的な方向性には、次のように述べている。

子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにするためには、子供たちが「どのように学ぶか」という学びの質が重要になる。(p.23)

そのような主体的に学ぶ力を育む指導のヒントが本書には多くあり、非常に学校現場に役立つと思われる。

第2部には、多くの実践が紹介されている。学校の教員全体で行う総合的な学習の時間を活用した読書指導の実践、授業以外に校舎内にある掲示板を活用した読書指導、国語科の授業実践等、様々な実践が活動案やワークシートと共に具体的に述べられている。また、その読書指導の結果として、子どもにどんな力が育成されたかも明確に分かる。そして、子ども自身の学習の振り返りに関する記述が掲載されているので、子どもの変容もよく分かる。読書指導をどのように進めればよいか悩んでいる教員でも、「この実践なら取り組みたい」と思える実践をひとつは見つけられるであろう。

多くの実践のなかで、教員がはっとするのは、杉本氏の「わたしの読書生活記録」の実践ではないだろうか。なぜなら、読書カードに取り組んでいる学校は多いが、配布して満足してしまってい

る学校が多いと思われるからだ。杉本氏は、「わたしの読書生活記録」について、次のように説明している。

「わたしの読書生活記録」は、読んだ日にちやページ数を書き込むだけの読書記録ではない。読書生活における様々な出来事を広く記録の対象としている。それはなぜか。そこには「考えて書く」という行為が存在するからだ。考えて書くという行為が、学習者一人一人に自身の読書生活を振り返らせ、未来の読書生活を具体的にデザインさせる。このような機能を欠いた機械的な読書記録では、その効果は限りなく薄い。

「わたしの読書生活記録」を書くことは、自分の読みと、読書という行為と、そして自分自身と向き合うことになる。(p.179)

この説明からも分かるように、「わたしの読書生活記録」は、子どもたち一人一人が自分の読書生活の具体的な未来像を描き、その時々状況に照らして自らの力で読書生活をデザインしていきける力を付けることを目的にしているのだ。

この実践は、学校で学んだことが、そこで閉じずに、子どもたちが日常のなかで活用していきける力を育てている。そして、子どもたちが生涯にわたって、自分の読みと、読書という行為と、そして自分自身と向き合う態度の基礎をつくっている。本書は読書指導に関する著書だが、杉本氏の実践は、読書指導だけでなく、様々な教科での指導法方法に生かせるものだ。教員がどのように指導すれば、子どもに実生活で活用していきける力を付けさせていきけるか、指導の過程を具体的に示している点でも、本実践の意義は大きい。

まずは、杉本氏の「わたしの読書生活記録」をもとに、各学校が子どもの実態に合わせた取り組みを一步進めることが、子どもたちを自立した読み手へと育てることになるだろう。

(横浜国立大学大学院 教育学研究科)